

## 審査委員長 講評

川上 元美（デザイナー）

一昨年、加賀市と山中町が合併して新たな加賀市へと生まれ変わりました。そのため、行政上の様々な要因により、一時この「雪のデザイン賞」も中断のやむなきにいたりましたが、幸い担当各位のご努力により、第4回目として復活することができました。

間を置いたにも拘らず、419点と前回にも増して多くの応募を得たことは大変有難いことです。

特に今回は、一昨年にラトビア国立自然史博物館にて中谷宇吉郎博士の業績をテーマにした展覧会が開かれた事が縁となり、ラトビア国内でも積極的に広報され、ラトビアから22点もの力作が集まったのは、うれしい出来事でした。

また、応募項目に映像が加わり、予想以上の作品が寄せられましたが、今一つ入賞に至るものがなく、今後に期待します。

様々な素材や技術を用いたクラフトや、アイデアをこらしたデザインの応募作品が集まるなか、第一次審査を画像データで審査し、50数点を選出しました。そして実物での本審査で賞を決めるのは例年と同じ方法です。

回を重ねて、今回の全体のレベルは上がっているためか、賞を決めるに際して、上位のレベルが拮抗しているものの、抜きん出る作品が見当たらず、議論を尽した末に結局金賞を選出できず、銀賞が2点という異例の結果になりました。

その一つが、“CONNECTION”とタイトル付けされた、詩情豊かに雪の降る森の風景を細密に織り込んだタペストリーです。深々と降る雪の、そして、枝から散り舞う雪霞でしょうか、その力量は確かで心を打つ印象的な作品です。これは、はじめて応募を得たラトビアからの作品でした。

もう一つは、“しもばしら”と表題のあるガラス皿、「ガラスの欠けた表情は雪や氷の儚さの

ようだ」と霜柱が光を受けて刻々と遷ろうさまを、淡い色のガラスでお皿の造形に託したもので、ガラスのテクニックや表現方法が多様に存在するなかでも、素朴であるが新鮮な作品。

銅賞の“CRISTAL CANDLE”はロウソクを雪の結晶の六花の形にデザインしたユニークなキャンドルです。「人知れず降り始めた雪、その一粒一粒にはちいさな炎が灯っている」と結晶の一つ一つを人の命の素に見立てた雪と炎のイメージが感動的です。

奨励賞には5作品が選ばれました。“UNRESTRAINED”、無拘束な、とでも訳そうか、解け行く野の雪の変化を写し取った絵本。

“ゆきだるまスタンプ”は愛くるしい雪だるまの形をし、雪をはじめ、冬に関する様々な図柄が可愛い。

“Exterior View, Interior Expanses”はガラスのパート・ド・ベールの技法で、降り積もる雪氷が構築する建物に見立てて、外からの眺めと内からの広がり进行考察した美しい作品。

“First Snow”、そして“雪の書”もユニークな作品でした。

佳作になった作品も奨励賞と僅差であり甲乙付け難く、7点の作品が選ばれました。

また審査を終えた一週間後、富山市で雪氷学会が開催されました。それに合わせて、新装なった富山市科学博物館にて、関係各位のご努力で、今までの「雪のデザイン賞」の入賞作品が多数、展示されました。

この「雪のデザイン賞」が、科学とアートの出会いのある、他に類を見ないコンペとして広がりを持つことは大変喜ばしく思います。

そしてこのコンペに益々質、量ともに創造性豊かな作品が集まり、雪の科学館が、ひいては加賀市が広く科学、文化を発信していくことを期待します。

